

1P53

自閉症児をもつ母親のストレス対処方略の日米比較

ポーター 倫子¹、ポーター ハンナ²、
ラブランド キャサリン³

¹ワシントン州立大学

²元テキサスA&M大学

³テキサス大学健康科学センター・ヒューストン校/医大

【問題と目的】

本研究の目的は、日米の自閉スペクトラム症（ASD）児の母親の育児ストレスに対する対処方法について比較分析し、文化に影響された要因を明らかにすることである。先行研究の中では、ASD児の親のストレスは、ASD以外の障がい児をもつ親や定型発達児の親に比べ、はるかに高いことが報告されている。育児ストレスを軽減するための対処方法についても研究が行われているが、その多くが既存のコーピング尺度を用いた方法であり、国際比較した研究も殆ど行われていない。そこで本研究では、ASD児の母親への面接調査を通し、ストレスへの対処方法についての回答を分析し、日米の類似点・相違点を検討した。

【方法】

ASDの確定診断を受けた2-12才の子どもの母親（日本51名、米国53名）を対象に、半構造化面接を行った。質問は、「自閉症児を抱える母親であるために感じるストレスに対してあなたはどのように対処していますか」であった。面接の逐語録をもとに、質的研究支援ソフト MAXQDAを使用してオープンコーディングを行い、カテゴリーを抽出した。日米のカテゴリーにおける頻度と総数に対する%を計算し、さらに χ^2 乗検定、Fisherの正確確率検定で比較した。

【結果】

育児ストレスの対処方法として出現したカテゴリー名と日本及び米国の割合をそれぞれ示す。「周りからの支援」（51%、51%）、「好きなことをする」（29%、51%）、「子から離れ、自分の時間をとる」（22%、49%）、「仕事、学業等に打ち込む」（10%、17%）、「自分の心身を労わる」（8%、19%）、「リフレーミング」（14%、9%）、「深呼吸したり気持ちを静める」（2%、17%）、「信仰」（2%、17%）、「寝る」（6%、13%）であった。日米で有意差が見られたのは、「好きなことをする」「子から離れ、自分の時間をとる」「深呼吸したり気持ちを静める」、「信仰」であり、いずれも米国の方が有意に高かった。

【考察】

今回の研究では、日米ともに「周りからの支援」を受けることでストレスに対処している姿が見られたが、米国と比較し、日本の母親は、子どもから離れ、自分の好きな時間をとることが少ない結果が得られた。日本の母親への支援として、レスパイト・サービスの充実や、効果的なストレス対処の方法について紹介していくことの重要性が示唆された。

1P54

親がとらえる障がいをもつ子どもの性の現状と課題

川崎 有紀¹、西川 菜央¹、原 朱美¹、安藤 布紀子¹、
上村 由紀²、加藤 令子¹、酒井 ひろ子¹

¹関西医科大学看護学部

²社会福祉法人恩賜財団済生会支部大阪府済生会大阪乳児院

【目的】

平成30年厚生労働省「乳児院・児童養護施設の高機能化及び多機能化・機能転換、小規模かつ地域分散化」の通知を受け、「産前産後母子支援事業」と「予防再統合事業」を行っている。「予防再統合事業」の一部として特別支援学校に通う子どもの性に向き合う親を対象とした支援のあり方を検討するため、障がいをもつ子どもの親を対象に子どもの性に関連する質問紙調査を実施した。本報告では、特別支援学校に通う子どもと親の性に関連する支援プログラム構築に向けての基礎資料とするため、子どもの性の現状及び将来に向けての課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

特別支援学校に通う知的障がいをもつ子どもの親に対して、無記名自由記述式の質問紙調査を実施した。調査は4項目について行い、本報告では①子どもの性に関して気になることや困りごと、②将来的に最も心配な性に関する問題の2点について、内容分析により質的に分析した結果を述べる。倫理的配慮として所属施設の倫理審査委員会（2019216）の承認を得た。

【結果】

26名の親（父親1名・母親25名）より回答を得た。子どもの性別は女子が6名、男子が20名で子どもの平均年齢は13.7歳であった。子どもの現状については、『公的な場で行う性行動』『他者へ近づきたい衝動をコントロールできない』『性衝動に対処できない』『自分で対処する性行動』『自分の性衝動を隠す』の5カテゴリーが抽出された。また、親がとらえる将来の性に関する問題は、『性被害への懸念』『性加害への懸念』『異性への興味・関心』『他者との距離の取り方』『身体的成長と心理的成長の乖離』『妊娠と結婚』『子どもの性衝動に対する親としての対応』の7カテゴリーが抽出された。

【考察】

親がとらえる子どもの性の現状は、『自分で対処する性行動』『自分の性衝動を隠す』の正常な反応が見受けられる一方で性衝動、性行動のコントロールに課題があることが明らかとなった。将来的に、性被害や、性加害行動へ発展し得る課題として捉えている。今後は、障がいをもつ子どもを対象とした性の課題を明らかにすることが必要である。さらに、障がいをもつ子どもが理解できる手法を開発し、性教育のあり方を改めて提示していくことの必要性が示唆された。